大仙市立豊川小学校　校長室だより

ゆめアップ 豊川っ子

令和２年度　第５４号　2021. 2. 24

たくさんのご参加ありがとうございました　～　学年末PTA　～

２月１９日（金）のＰＴＡには全ての保護者に参加していただきありがとうございました。授業参観では、低学年はチームで協力する姿を、３年生は目的に応じて定規やコンパス等を使う姿を、４・５年生は相手意識をもってプレゼンする姿お見せしました。６年生はティーパーティーで家族へ感謝の気持ちを伝えました。

保護者の皆様のおかげで、子どもたちは、コロナに負けることなく順調に育ってきています。どの学級も、子どもたちと先生方の関係がよく、学校として共通する約束・学習規律を守り、適度な緊張感をもって生き生きと学習している様子を見て取れました。

また、今年度は閉校記念事業も多くあり、例年にも増して保護者の皆様にはＰＴＡ活動に尽力いただき感謝申し上げます。ＰＴＡ全体会において、閉校に係ることや豊成小学校開校への動きについて古村ＰＴＡ会長、学校等から話がありました。主な内容は次の通りです。

【６年生】

【１・２年生】

【３年生】

【４・５年生】

○古村ＰＴＡ会長
- 先日行った閉校記念式典のＤＶＤ（映像）を各家庭に配布する。
- 閉校記念事業実行委員会として花津谷先生、黒澤先生に感謝状を贈呈する。
- 豊成小学校ＰＴＡ準備委員会を3/4開催予定。規約、役員選出等の確認をお願いする。新役員に推されたら引き受けてほしい。

○大阪校長
- 豊成小学校の児童数は現時点で１０５名、職員数１８名。
- 令和３年度豊成小学校のの始業式４／６、入学式４／８、ＰＴＡ設立総会４／２０、開校記念　式典５／１の予定。
- 本校の校歌タイトルを「永久（とわ）に輝く　我が郷土」としたい。

○村上記念誌部長
- 閉校記念誌は３月上旬に記念誌部で袋詰めを行い、体育文化後援会推進委員を通じて豊川地区全戸に配布する。

○黒澤教頭
- １～５年生の保護者は、豊成小学校の一斉メールの登録を３／３１まで済ませてほしい。（ＰＴＡ当日配布資料参照）

円満造甚句踊り･ロックドンパン　踊り納めの会
～伝え合う喜び･踊れる喜び･受け継ぐ喜び～

１７日（水）、全校が集まって、みんなで「ロックドンパン」と「円満造甚句踊り」の踊り納めをしました。踊り終えた後、在校生から６年生に対しては、これまで教えてもらったことへの感謝の言葉と共に、地域の行事などでまた一緒に踊れる機会があればうれしいという気持ちを伝えました。そして、６年生からは、地域の宝である「円満造甚句踊り」を大切にして、踊り継いでほしいことが在校生に伝えられました。

ふるさと教育が叫ばれて数十年経ちましたが、本校の子どもたちは「円満造甚句踊り」を通じてふるさとのよさを実感しています。正に伝統の力です。伝え方は変わるかもしれませんが、豊成小学校でも踊り継がれることを期待したいです。

冬まつり集会

２月１６日に全校で冬まつり集会を行いました。縄跳びや体操など校内でもできる遊びやゲームを通じて縦割りで交流しました。全校で楽しむことができました。

中仙公民館見学　～2年生～

先週、２年生が生活科の「まちの施設見学」の学習で中仙公民館（ドンパル）を訪れました。研修室、キッズルーム、トレーニング室、図書館などを見ることができました。ホールに２階には水神社御鏡のレプリカも展示されており、子どもたちは興味津々でした。館員の方に説明を受けたり、子どもたちが質問したりして、充実した学びの時間でした。

魁新報「えんぴつ四季」から

本校の卒業生である冨岡洋子さん（上鶯野在住）が執筆した、本校を題材とした投稿が２月２２日魁新聞「えんぴつ四季」に掲載されました。ご覧になった方もいらっしゃるかと思います。寂しさと未来への期待の思いに触れ、本校は、地域の学校であることを再認識しました。ありがとうございました。（以下魁新報抜粋）

時の流れ

豊川小学校、豊成中学校。私の母校である二つの学校は間もなく閉校し、4月になればその名前はなくなってしまう。

校舎は地域の中心的な建物であり、人々が集う場所だった。きっと、いろいろな毎日を見届けてきたに違いない。ここには数え切れない思い出が刻まれている。

私が小学校に入学する時、「豊川の偉い人」として3人の名前を聞いた。「浅利校長、名古屋巡査、佐藤えしゃ（医者）」。

えんぴつ四季

当時の豊川小の校長先生、駐在さん、地域のお医者さんの名前である。大人は誰ともなく、子どもたちにそう教えていた。

小学校の校舎は私が3年生だった秋の台風で一部が壊れてしまい、敷地内に新しく建て替えられた。もともと当時の校舎とグラウンドは離れていたので、運動会の時などは高学年の子どもたちが机や椅子を運んでくれた。みんなでグラウンドまで頑張って歩いたものだった。

雪が降り積もれば、在校生の親たちがかんじきを履いて歩き、道をつくってくれた。ひどい吹雪の日には、ほっかぶりにマントを羽織った親たちが迎えに来て、校門前で子どもたちを待っていた。

良くも悪くも、時は止まることなく進み、時代は流れていく。母校がなくなってしまうことには寂しさがある。けれど、次の未来を育む子どもたちにとって幸多い日々が待っていると、私は信じている。

冨岡　洋子(71)　大仙市上鶯野・農業